

Title	資本理論の二つの型 - ハイエク「資本の純粹理論」研究 (その二) -
Author(s)	前田, 敬四郎
Citation	經濟論叢 (1954), 73(6): 391-403
Issue Date	1954-06
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132363
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第七十三卷 第六號

- カレツキにおける獨占度概念の發展……嶋 津 亮 二 (1)
- 日本における金本位制の成立……………眞 藤 素 一 (23)
- 資本理論の二つの型……………前 田 敬四郎 (43)
- 會計検査院編 昭和28年 會計検査院年報…島 恭 彦 (56)
- エルスナー 「經濟恐慌」 (紹介) ……吉 信 爾 (60)
-

〔昭和二十九年六月〕

京都大學經濟學會

資本理論の二つの型

——ハイエク「資本の純粹理論」研究（その二）——

前田 敬 四 郎

序

ハイエクの「資本の純粹理論」（一九四一年）は、單にハイエク自身にとつてその主著ともいふべき勞作であるにとどまらず、またオーストリア學派（ウィーン學派）の資本理論に伏在する基本的な考え方を、もつとも組織的かつ集約的に論述したものととして、すでに極めて高い評價を勝ち得ている。しかしまた他面、その評價の高さにもかかわらず、比較的論評されることの少いのもこの「資本の純粹理論」の特徴といふことが出来る。恐らく、理論の構想が極めて複雑であり、論點がまた甚だ多岐にわたつてゐるということと相俟つて、論述の方法が難解晦澁を極めてゐるという點が、この書物の普及を妨げてゐるといつても過言ではないと思う。私は前稿において、主として、ハイエクの貨幣的要因と實物的要因の取扱ひ方に著目して、この難解晦澁な勞作を理解するための一つの手懸りを求めることにした。本稿ではさらに進んで、資本理論そのものの問題の設定方法とこれに對する分析方法という點から、ハイエク「資本の純粹理論」の解明手懸りを求めようと思つてゐる。

(1) 前田敬四郎「貨幣的要因と實物的要因」（經濟論叢 第七十二卷第四號 昭和二十八年十月）

まずハイエクが何を資本という言葉で定義しているかを明かにすることから始めようと思う。けれど定義の仕方それ自身のうちに、すでにハイエクの問題の立て方を讀み取ることが出来ると思うからである。

ハイエクは資本を定義するに當つて、先づ資源 (resources) を二つの異なる觀點から分類している。第一の論點は永久的 (permanent)・非永久的 (non-permanent) という區別であり、第二の論點は生産可能 (producible)・生産不可能 (non-productive) という觀點である。まず第一の永久的・非永久的の區別から説明しておこう。永久的資源というのは、いわば使用によつて消耗しない資源 (non-consumable resources) ということである。例えばリカードが the original and indestructible powers of the soil と呼んだ土地のときは永久的資源の代表的なものである。これに對して非永久的資源というのは使用によつて消耗する資源 (consumable resources) であり、いわゆる原材料・機械設備などはほとんどすべてこの範疇に屬する。ただ永久的と非永久的との境界については、必ずしも明確ではなく、たとえば鐵筋コンクリートの建物などは、ある時には永久的資源に含められ、またある時には非永久的資源に含められている。毎日を單位とするような極めて短期の分析にとつては、鐵筋コンクリートの建物は永久的資源とみなしても何ら差支えが起らないであらう。

次に生産可能な資源と生産不可能な資源の區別について一言しよう。生産可能な資源はまた増加可能な資源 (increasable resources) ともいふ、通常任意可増財といわれるものにあたる。生産不可能な資源というのはまた本源的資源 (original resources) ともいわれ、古典學派以來本源的生産要素と稱されているものに當る。

ハイエクはこれらの二つの分類基準を利用して財貨を四つのグループに分けている。ハイエク自身の考案した表にもとづいてそれを示しておこう。¹⁾

資源の種類	永久的(非消費的)	非永久的(消費的)
生産不可能な(本源的な)	a	b
生産可能な(増加可能な)	c	d

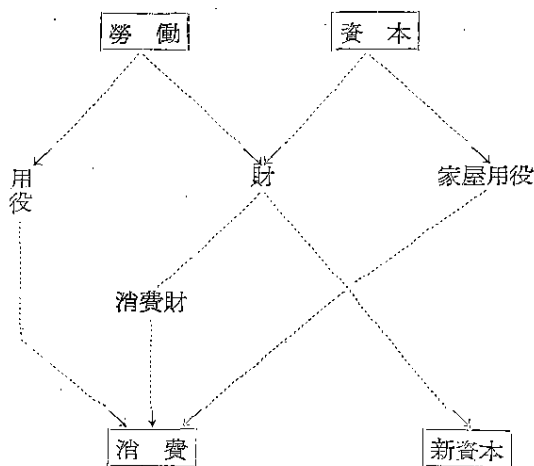
ハイエクが資本というのはこの表の *b* と *d* である。すなわち、ハイエクの定義する資本は「非永久的資源の總體」にほかならない。この機会にこの表を利用して、他の

の著名な經濟學者の資本の定義について一言觸れておこう。もつとも廣い資本概念はこの表の *a* *b* *c* *d* の總てを含んでいる。たとえばフィッシャーの資本・ワルラスの廣義の資本²⁾とはそれであり、最近の社會會計 (social accounting) における資本概念もまたこれである。³⁾ 次に最も狭い資本概念は例えばワルラスの狹義の資本、すなわち *d* である。ハイエクの資本概念はいうまでもなくこの中間である。なおこのほかにも例えばカルドアのごときは *c* と *d* を併せて資本を定義している。

- (1) F. A. Hayek, *The pure theory of capital*, 1941, p. 58. 邦譯「谷藤一郎『資本の純粹理論I』」(昭和二十七年版)五八頁。
- (2) フィッシャーの資本概念については、例えば I. Fisher, *The Nature of Capital and Income*, 1906 參照。
- (3) ワルラスの資本概念については L. Walras, *Elements d'économie politique pure ou théorie de la richesse sociale*, 1874—77. 邦譯手塚壽郎「純粹經濟學要論」(岩波文庫)參照。
- (4) カルドアは資本を「増加可能な資源」と定義している。N. Kaldor, *The Recent Controversy on the Theory of Capital*, *Economica*, vol. 5, No. 3, 1937.

二

先に最も廣い資本概念は前掲の表の中 a, b, c, d の總てを含むということを指摘しておいた。例えばヒックスは次の如き表を掲げているが、そこでは資本は物的資源の全體すなわち前表の a, b, c, d すべてと全く等義である。¹⁾



現にヒックスは資本を定義して「經濟學において社會の資本（すなわち富）というのはある一時點において社會がもっているあらゆる種類の財貨のストックである」と書いている。従つて土地といえどもこの場合の資本の定義には含まれるわけである。これに對してハイエクの資本の定義は前述のように非永久的資源のみを含み、永久的資源は除外されている。このことによつてハイエクが資本の問題を取扱う際に更新 (replacement) という要因を特に重視したことのあらわれと見ることが出来る。けだし非永久的な資源は使用によつて消耗し、そこに更新の問題が起るのに對し、永久的な資源は使用によつて消耗しないから更新の問題の起り得る餘地は全くない。ハイエクが資本を定義するにあたつて永久的か非永久的かという分類基準に重要な意味を持たせたのは、いいかえれば更新が必要であるか否かを

重視することのあらわれてある。ハイエクのいう所によれば、初歩の均衡分析においてはしばしばあらゆる生産資源が永久的であり、更新の必要がないものと想定されている。すなわち「かかる手法は最初の接近としては便宜である。何故なれば、多くの現存資源が耐久性の有限のものであるに過ぎないという事實を考慮の中に入れると忽ち發生する複雑さを無視して、多くの重要な諸關係を分析することが、この手法によつて可能になるからである。それは經濟過程を「定常的」なものとして取扱ひ、時間的に發生する總ての變化を度外視することを得せしめる一つの手法である」³⁾要するにそれは時間のない經濟の分析であり、又同時に資本のない經濟 (Kapitallose Wirtschaft) 外ならないと見るわけである。したがつて資本理論が眞に動學的な内容を持つためにはこの點の修正が必要であると見られる。その意味から「この永久的資源と非永久的 (または「消耗的」) 資源の分類は本研究において追及する資本問題への接近にとり根本的に重要なものである」⁴⁾と見られているのである。

このようなハイエクの見方については必ずしも全面的に賛成出来るとは限らないが、⁵⁾少くともこの定義の仕方の中に、すでにハイエクの基本的な見方が反映されているという點だけを、さし當り強調しておくことにしよう。

- (1) J. R. Hicks and A. G. Hart, *The Social Framework of the American Economy, An Introduction to Economics*, 1945, p. 45. 邦譯 沼井正三郎「經濟の社會的構造」
- (2) J. R. Hicks and A. G. Hart, *ibid.*, p. 46.
- (3) F. A. Hayek, *ibid.*, p. 50. 邦譯「五十四頁」
- (4) F. A. Hayek, *ibid.*, p. 51. 邦譯「五十五頁」
- (5) この點は後に論及する。

三

これだけのことを見ておいて、次にハイエクのいわゆる「現代における資本問題への二つの接近法」(the two current methods of approach to the capital problem)についてごく簡単な説明を加えておこう。

彼が二つの接近方法というのは、英米流の取扱いとオーストリア流の取扱いであるが、とくに彼がここで英米流というのは、「アルフレッド・マーシャルの教によつて影響せられている諸學者の見解」と書かれていることによつても明かなように、主としてケンブリッジ學派の見方である。

まずハイエクは、次のようにケンブリッジ學派とオーストリア學派の見解を對比的に表示している。¹⁾

ケンブリッジ學派

1 資本は極めて耐久的な財貨からのみ成立っているかのように、固定資本の役割にもつぱら重點がおかれている。

2 資本財という言葉は耐久財のために用いられ、不連續的または周期的にのみ置換を必要とするものとして取扱われる。

3 資本財の供給は比較的短期間には一定と考えられている。

オーストリア學派

1 生産過程の期間から發生する流動資本(circulating capital)の役割に重點がおかれている。ただしこのことはあらゆる資本のある特性を明白に引出すからである

2 非永久性ということが資本財の特徴的な性質と考えられ全資本の連續的な再生産の上に重點がおかれている。

3 資本財のストックは絶えず消耗され、再生産せられつつあるものと考えられている。

4 利子率の變化が、ある特定の資本財の價值に及ぼす影響を理解するために考慮すべき當該時間要素は個々の資本財の耐久性である。

5 生産に利用せられる技術は一定の技術的知識の狀態によつて決定せられ變更し難いものと考えられる。

6 資本に對する需要は主として生産の水平的擴張、すなわち既存の種類の設備の重複化から發生するものであると考えられる。

7 資本ストックの附加を誘發する變化は、絶對的需要の増加、つまり消費財に對する全貨幣支出の増加に求められる。

8 生産の水平的擴張を可能なものと思はしめるために、總ての種類の未利用資源の存在が考えられる。

9 資本財に對する需要は消費財に對する需要と同方向であるが、その程度において激しく變化する。

10 分析は貨幣的に行われ、需要の變化は全體の貨幣の流れの大きさがそれに對應して變化することを意味すると考えられる。

4 決定的要因はある特定財の個々の耐久性ではなくてその特定財が寄與する最終役の完成するまでに經過する時間である。すなわち關係を有するとみなされるものは財貨の個々の性質ではなくて全體の時間的生產構造において占める個々の財貨の位置である

5 種々の技術的生產方法の中、何れが利用せられるかは、各時點において利用出来る資本の供給によつて決定される。

6 附加資本は生産技術の變化を可能ならしめ生産構造を垂直的に變化せしめるために需要せられるものと考えられる。

7 資本ストックの變化は消費財と生産財の各々に對する相對的需要の變化によつて決せられるものと考えられる。

8 資本の増加に關聯せる生産技術の變化を力説するために常に完全利用の存在が考えられている。

9 資本財に對する需要は消費財に對する需要と正反對の方向に變化するものと考えられる。

10 分析は實物的に行われ、從つて何處かにおける需要増加は必ず何處かの需要がそれに對應して減少することを意味しなければならぬ。

- (1) F. A. Hayek, *ibid.*, pp. 47 ff. 邦譯 I、五〇頁。

四

このように圖式的に、二つの對立する見解を列舉して、兩者の特徴を對比しようとする試みには、しばしば不當な誇張と過度の單純化が伴いがちである。ここで採上げたハイエクの圖式化にもまたその弊害を否定することは出来ない。いまかりに最も顯著な一例をあげるならば、ハイエクはこの表の1において、ケンブリッジ學派はもつぱら耐久的財貨のみ資本として重視し、固定資本の役割に重點をおくかのごとく書いている。しかしこれは明かにケンブリッジ學派にとつて不當な要約である。例えば *working capital* が景氣變動において果す役割についてはロバートソンのすでに古典的ともいわれるすぐれた研究がある。またホートリーのこの問題に關するすぐれた研究もすでに一九二〇年代にあらわれている。²⁾ またケインズおよびホートリーが變動過程における *liquid capital* の役割についてすぐれた先驅的な研究を發表していることも周知のとおりである。このような點を考慮するとき、ハイエクのように、ケンブリッジ學派を目して、資本を極めて耐久的な財貨からのみ成立つかのように見て、もつぱら固定資本の役割にのみ重點を置いたと見るのは、ケンブリッジ學派を故意に歪めて、自己の主張を有利に導くものと曲解されないとも限らない。しかしそのような個々の點に捉われずに、ここに列舉された十項目のすべてを通觀すると、そこに全體として極めて鮮かにこの二つの對立する見解が特徴的に對比されているのを讀み取ることが出来ると思う。

さしあたりハイエクみずからがその中心をなすと見られるオーストリア學派についてのみ指摘することにしよう。いうまでもなくオーストリア學派の資本理論の學說史的淵源はボーム・バヴェルクの生産構造の見方にまでさかのぼることが出来る。極めて要約的にいうならばオーストリア學派の資本理論を他の諸學派のそれから顯著に區別するところのものは、生産による財貨の流れを一つの老大な時間的構造 (time structure) として把握することである。すなわち本源的生産要素からわれわれの消費にいたるまでの全生産過程を一つの老大な財貨の流れと見、それをわれわれの消費からの時間的距離によつて整序し、全體としての財貨の流れの時間的構造を構想することがボーム以來のオーストリア學派に共通する特徴的な考え方である。このような圖式において資本というのはこの老大な財貨の流れの總體である。ただオーストリア學派においては、この財貨の流れが一つの時間的構造をもつてゐるために、それが資本として捉えられるときにもその時間的構造が全體として切離しがたい關係をもつてゐることである。この點ケンブリッジ學派の資本概念としばしばその内容において類似してゐるように見える場合があつても、しかもなお兩者のあいだに本質的な相違があると見られる理由である。

このように資本を見ることから、當然資本財ストックは絶えず消耗され、再生産せられつつあるものと考えられることになる (前掲表 3)。また「非永久性」ということが資本財の特徴的な性質と考えられ全資本の連續的な再生産の上に重點がおかれてゐる (前掲表 2) し、さらに「生産過程の期間から發生する流動資本の役割に重點がおかれてゐる。けだしこのことはあらゆる資本のある特性を明白に引出すからである」 (前掲表 1)。なお「資本財のストックは絶えず消耗され、再生産せられつつあるものと考えられる」 (前掲表 3) という見方もこれらのことから容易に推察されることである。

さて次に問題になるのはこの生産の時間的構造の變化の問題である。さしあたりまずそこでは資本の完全利用が前提されている（前掲表8）。したがつていま投資を行おうとしても、未利用の資源を動員して、投資の目的を達成することは出来ない。したがつて、すでに何らかの用途に使用されている財貨を、價格機構（price mechanism）を通じて投資の用途に轉用せしめなければならない。信用創造による價格インフレーションと、それに伴う強制節約（forced saving）のプロセスがそれである。生産財の増加は當然に消費財の削減となり、その意味で資本ストックの變化は生産財と消費財のおののに對する相對的需要の變化によつて決定せしめられると見られるわけである（前掲表7）。オーストリア學派において技術といわれるものは、財貨の流れの時間的構造にほかならない。すなわち生産の迂回化が長いほど技術は高度と見られている。したがつて前述のような形で行われる投資は當然にこの意味での技術に重要な變化を興える。むしろオーストリア學派の資本理論においては技術の變化なしに行われる投資といふことは、最初から考えることすら出来ないものである。このような點は前掲の表の5および6に示されているがケンブリッジ學派の資本理論と比べて極めて顯著な特徴を形成している。

- (1) cf. D. H. Robertson, *Banking Policy and the Price Level*, 1926, pp. 42 ff.
- (2) R. G. Hawkey, *Working Capital, Trade and Credit*, 1928, pp. 119—141.
- (3) J. M. Keynes, *A Treatise on Money*, vol. II, 1930, pp. 130—147.
- (4) あらうはまたこのような生産の時間的構造を維持する「生存基金」(subsistence fund)でもある。
- (5) これらの點は F. A. Hayek, *Prices and Production* を見よ。

五

このように見て來ると、ハイエクを中心とするオーストリヤ學派の資本理論が全體としてどのような想定の上に立ち、どのような問題を構想しているのか、ほぼその大要を推察することが出来ると思う。たしかに、このような見方から數多くの有益な結論と卓抜な考察を抽出することは可能であらう。しかし他面またこのような接近法に内在する固有の缺陷もまた見逃し得ないと思う。以下それら若干の論點を列舉的に指摘しておこうと思う。

(1) ハイエク自身が前掲の表の8において明白に指摘しているように、そこでは資源の完全利用が前提されている。このことの歸結として表の7に述べられているように、消費財の増加は生産財の削減、生産財の増加は消費財の削減というように、需要増加を常に相對的なものと見ることの一つの重要な理由となつてゐるわけである。しかし資源の完全利用の前提をこのように墨守する理由は必ずしも明白ではない。何故未利用の資源の存在を前提してはならないと見るのか、この點必ずしも明確な説明が與えられていない。現にわれわれの見る經濟世界には多くの未利用資源が遊休の状態のままで放置されている。ハイエクはなぜこの點を考慮のなかに採入れようとしないのであらうか。ハイエクと同じくボエーム・バヴェルクの影響を少からず受けたシュンペーターが、資金創造の効果を論ずるにあつて、いわゆる轉置的 (substitutive) な効果と添加的 (additive) な効果とを並べて擧げているのは興味深い。⁽¹⁾ 轉置的な効果というのは信用創造の結果いわゆる強制節約 (forced saving) を通じて資源の用途の轉換が行われる場合であり、ハイエクがもつばら問題とした場合に相當する。添加的な効果というのは信用創造による追加的購買力

により遊休の資源が動員され、生産構造の流れを形成する財貨の量が全體として増加する場合である。ハイエクは何故追加的な効果を探上げようとしないのであるか。少くとも充分に説得的な説明を聞くことは出来ないようである。

(2) この點と関連して、表の9はいわゆる「派生需要の加速度原理」に對するケンブリッジ學派とオーストリア學派の見解の相違を對比している。この點についてもオーストリア學派の見方、すなわちハイエク自身の見方には必ずしも容易に同調しがたい。しかしそれについてはすでに前稿において若干の指摘を行つたから、ここではそれを繰返さないことにしようと思う。

(3) ハイエクが資本の理論を必然的に時間を通じる過程の經濟理論であると見、したがつて本質的に動學理論でなければならぬと見るのは妥當な見解のようである。しかし先に本稿の二においてすでに引用した箇所に見られるように、財貨の耐久性を無限と想定した經濟理論は經濟過程を靜態的として取扱ふことを得せしめ、したがつて時間的に發生するすべての變化を度外視せしめると見てゐるのは必ずしも首肯し得る見解ではない。何となれば、經濟的過程に時間の入込む方法は必ずしも一通りでない。ハイエクが資本の理論を目して本質的に動學的理論でなければならぬとするのは正當な見解である。しかしそれをもつばら更新の問題とのみ結附けて解釋するのは正當な見方ではない。

(4) このように見て來ると、ハイエクの資本概念そのものの定義についても若干の疑問が起つて來る。すでに説明したように、ハイエクは現在の通説的見解たる生産過程に存在する財貨の總體をすべて残りなく資本と解釋するフイッシャー、ヒックス等の見解と異り、非永久的資源のみを資本と考える。その理由はもつばら更新の觀點を極度に重視するためであつた。たしかにハイエクの取扱ひ方にある種のすぐれた著眼の含まれてゐることは否定出來な

い。しかし更新の觀點が資本を特徴附けるために最も鋭い分類基準になるかどうか、必ずしもハイエクの見方に全面的に迫隨することを得ないと思う。もしそうであるとすれば、フィッシャー、ヒックス流のプラクティカルな有用性をもつ取扱ひ方を排して、一見捉えがたいハイエク流の見方を採用せねばならぬ積極的な理由は必ずしも存在しないであらう。

(1) シュンペーターの見解については鎌倉昇「シュンペーターの資本主義論」(經濟論叢、第七十一卷第五號、昭和二十八年五月)二八頁參照。

(2) ケインズは労働および資本がいずれも不完全雇用の状態にある場合と、そのいずれかが完全雇用にたつた場合を分けているが、前者の場合添加的效果があり、後者の場合轉置的效果があるといっているわけである。

(3) 前田敬四郎、前掲五七頁。

(4) この點例えば青山秀夫「現代景氣理論における販路法則の問題」(經濟變動理論の研究、第二卷所收)參照。

〔附記〕前稿においては邦譯として昭和十九年版を使用した。本稿においては昭和二十七年版を利用した。このため前稿と多少引用ページに相違の生じたことをお詫びしておきたい。